Press Release

Monet

Questioning Nature

ARTIZON MUSEUM

M'O Musées d'Orsay et de l'Orangerie

クロード・モネ《睡蓮の池、緑のハーモニー》1899年 油彩、カンヴァス オルセー美術館蔵 ★

Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Stéphane Maréchalle / distributed by AMF

クロード・モネ —風景への問いかけ

オルセー美術館・オランジュリー美術館特別企画

2020.7.11 Sat.—10.25 Sun.　会場：アーティゾン美術館

印象派の画家クロード・モネ（1840-1926）は、自然の中の外光の美しさに魅了され、その探求と表現方法の追求に生涯を捧げ、風景画を革新したことが知られます。モネが生み出した風景画は、それまでの風景を描いた作品のあり方を根底から覆し、新しい時代の世界観とその詩情を伝達する手段を創造するものでした。

本展では、モネの画業の重要な時代と場所、すなわちル・アーヴル時代、アルジャントゥイユ時代、ヴェトゥイユ時代、1880年代の旅の時代、ジヴェルニー時代と、それぞれを丁寧にたどります。モネが各々の時代に、各々の土地で何を見て、どのように描き、どのような主題をイメージに込めたのかを丹念に探り、画業の終盤に手がけた睡蓮の連作へといたる過程をなぞることで、個々の作品が連続性のなかで発展していることを示します。また、モネの画業に重大な影響を与えた同時代の画家たち、あるいは新しい表現方法としての写真作品、西洋の文脈とは全く異なる質を持つ浮世絵などの日本美術、さらには水辺の情景を視覚化したエミール・ガレらによるアール・ヌーヴォーの工芸作品も展示します。

オルセー美術館主席学芸員・学芸部長のシルヴィー・パトリが監修をつとめ、アーティゾン美術館とともに作りあげる本展は、オルセー美術館が誇るモネ作品とその関連作品計96点にアーティゾン美術館をはじめとする国内の美術館や個人の所蔵品を加えた約140点で、風景画家としてのモネに迫る展覧会です。

[本展の見どころ]

❶ モネの画業を年代順に追い、風景画をどう革新したかに迫る

クロード・モネはその生涯を通じてさまざまな場所を経巡り、さまざまな方法で制作を行っています。モネの画業を年代順に追い、晩年の「睡蓮」の連作へと繋がっていくテーマや技法を順を追って提示し、モネの風景画の革新性に迫ります。

❷ 同時代の画家たちや写真、浮世絵、アール・ヌーヴォーの美術工芸など、様々なジャンルの視覚表現と交錯させる、前例のない全く新しいモネの展覧会

モネの風景画制作は、穏やかな情景や、時に雪、風、雨といった猛威を振るう自然に向き合い、それをありのままに画布に留めた、と説明されがちです。しかしモネの風景画は、実は画家の弛まざる探求による幅広い視覚的・芸術的教養から育まれたものだったのです。自然との対峙を起点としながらも、モネは過去の、あるいは同時代の画家たちの影響に留まらず、写真や浮世絵など、大きく変貌を遂げつつあった同時代の様々な表現媒体によるイメージの展開に対して、画家としての自分の立ち位置を明確にしたのです。

❸ オルセー美術館が誇るモネ・コレクションから選りすぐりの作品が来日

オルセー美術館が所蔵するモネの絵画作品は73点。世界で最も重要かつ網羅的なコレクションのひとつです。これはモネの画家仲間ギュスターヴ・カイユボットをはじめ、多くの人たちの寄贈により形成されたもので、このコレクションを通じて、印象派を一人で要約しているかのようなモネの画業を辿ることができるのです。今回はその中から日本初公開22点を含む選りすぐりの42点が来日します。

クロード・モネ《トゥルーヴィルのロシュ・ノワール・ホテル》1870年 油彩、カンヴァス オルセー美術館蔵 ★ Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

セクション 1

モチーフに最も近い場所で

―1860年代、ノルマンディーとフォンテーヌブローで

最初のセクションでは、コローやウジェーヌ・ブーダンら少し前の世代の絵画と関連付けながら、1850年代の終わりから1860年代半ばにかけて、若きモネの自然主義的アプローチによる風景画が生まれた過程を辿ります。モネがその師ブーダンに出会ったのは1856年のことでした。モネは後年、過去を振り返る発言の中で、この出会いがいかに決定的であったかを語っています。

「自分が画家になれたのは、ブーダンのおかげです。」

クロード・モネ《ルエルの眺め》1858年　油彩、カンヴァス
丸沼芸術の森（埼玉県立近代美術館）蔵

本作には後のモネの作品で顕著となる特徴、すなわち戸外での制作と自然の写生、風景の構成要素としての水と大気の効果、色彩の明るさと豊かさを見てとることができます。

セクション 2

写真の部屋

―モチーフと効果

19世紀になって画家たちがアトリエから出て戸外で風景画を描きはじめた頃、こうした動向に追随するように、1850年代に活動を始めて間もない写真家たちも自然と向き合って仕事をするようになりました。フォンテーヌブローの森は、画家と写真家の双方にとって戸外制作のアトリエとなっていきました。1860年代半ばにはモネもここで絵画制作を行っています。絵画と写真というふたつの表現技法による自然の活写は、その後の風景画の改革へと繋がっていくのです。

ギュスターヴ・ル・グレ（1820-84）
《フォンテーヌ・ブローの森、バ＝プレオの下草》1852年
アルビュメン・プリント　オルセー美術館蔵
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / image RMN-GP / distributed by AMF

セクション 3

《かささぎ》をめぐって

―雪の色

モネは画家としての生涯の中で幾度も雪からインスピレーションを受けて作品を描いています。1869年に描かれた《かささぎ》には、桃色や紫がかった樹葉、青みを帯びた灰色の垣根や黒いかささぎの影など、そこかしこに白という色についてのモネの探求の成果があらわれています。雪の積もった景色は、視界の凹凸を平滑にしてしまいますが、モネはここで浮世絵の雪景と同様に、繊細な色彩の面を重ね合わせることによって見事に奥行きを表現しています。

クロード・モネ《かささぎ》1868-69年　油彩、カンヴァス
オルセー美術館蔵 ★
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Adrien Didierjean / distributed by AMF

クロード・モネ《日傘の女性》1886年　油彩、カンヴァス
オルセー美術館蔵 ★
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Stéphane Maréchalle / distributed by AMF

日傘をさしながら土手に立つ女性ポートレートは風景画のような趣きで描かれています。

セクション 5

季節の移り変わり

―ヴェトゥイユ

モネは1878年から1881年までパリの北西、セーヌ川の河畔にあるヴェトゥイユに居を移しました。この土地でモネは庭の外れのセーヌ川の土手に画架を据え、移り変わる季節によって姿を変える自然を観察しました。アルジャントゥイユと違い、ヴェトゥイユは工業化を免れてはいますが、いたって平凡な村であるがゆえに気象現象が重要な要素として浮き上がってきます。同じ視点の繰り返しは、1880年代の連作風景画の初期の試みを先取りするもので、後年の睡蓮を予告しています。

セクション 4

現代生活の情景

―パリとアルジャントゥイユ

パリの中心にあるサン＝ラザール駅の近代建築はモネの好奇心を大いに煽ったようで、11点ないし12点の作品が制作されました。モネはそのうち8点を1877年の印象派展に出品し、印象派の風景画が担うべき現代的使命を大胆に打ち出したのです。一方で、モネはこの駅から出る汽車を利用して簡単に行くことのできるパリ郊外アルジャントゥイユに1871年末から翌年の半ばまで居を構えました。モネはセーヌ河沿いの行楽地の情景を描くとともに、工業化が進展しつつある側面にも着目しています。

クロード・モネ《サン＝ラザール駅》1877年　油彩、カンヴァス　オルセー美術館蔵 ★
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Benoît Touchard / distributed by AMF

セクション 6

1880年代の制作旅行

1880年代、モネはしばしば家族を残してフランス各地へ出かけて風景画を描きましたが、国内はもとより、外国にも滞在しています。こうして各地へ出向くことで、モネはさまざまな地形や季節、光のもとで自らの芸術を試したのです。

クロード・モネ《ベル＝イルの岩場―荒れる岸壁》
1886年　油彩、カンヴァス　オルセー美術館蔵
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

1886年9月から11月まで滞在したブルターニュ地方沿岸の島ベル＝イルで、モネの関心は荒れ狂う海と波に翻弄される岩に向けられました。海を見おろす構図は、モネの作品の中でも日本の浮世絵との類似性を最も容易に見てとることができるものでしょう。

セクション 7

ジャポニスム

モネが自然と風景に対するアプローチを日本の美術、特に浮世絵から学んだことはよく知られています。20代半ばの1864-65年頃から親しんでいた浮世絵から、西洋画にはない自然の見方を培いました。ジヴェルニーの家には浮世絵のコレクションがあり、このコレクションを《睡蓮》制作の現場にまで持ち込んでいたといいます。色づかいの鮮やかさのほかに、大胆な構図や地平線・水平線の配置、季節の移り変わりや連続性への配慮は、日本の浮世絵とモネの風景画との実り豊かな関わりを示したものといえましょう。

歌川広重
《東海道五十三次之内　亀山　雪晴》
1833-34（天保4-5）年　大判・錦絵
公益財団法人平木浮世絵財団蔵

クロード・モネ《ルーアン大聖堂、扉口、朝の陽光、青の調和》1894年
油彩、カンヴァス　オルセー美術館蔵　★
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Sylvie Chan-Liat / distributed by AMF

セクション 8

連作 - 反復 - 内的風景

1890年代になるとモネはひとつのモチーフを単独で描くことはほとんどなくなり、ポプラ並木や大聖堂など同じテーマに基づく一連の絵、すなわち連作を描くようになりました。1892年と翌93年、ルーアンに数週間滞在して手がけたルーアン大聖堂を主題にした作品は、後に連作30点として結実します。モネの関心は建築の正面に向けられ、曇った日や晴れた日、夕べや朝など、光の具合によって色が変わる様が描かれました。

セクション 9

世紀末、ピクトリアリズムの風景写真

1890年代の半ばから、写真家たちも撮影対象への従属から自由になることを求め、より内面化した形で風景にアプローチするようになりました。このセクションでは、写真の芸術性を高めようとした試み・ピクトリアリズムの写真家たちの作品を紹介します。エマーソンの《睡蓮摘み》は、モネが同主題の作品を描いたのとほぼ同時代の作品です。

ピーター・ヘンリー・エマーソン（1856-1936）《睡蓮摘み》1886年　臭化銀乳剤を塗布したガラス製ネガからプラチノタイプ紙に焼き付け、カルトンに裏打ち　オルセー美術館蔵
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

セクション 10

ジヴェルニーの庭のモネ

―エティエンヌ・クレメンテルのオートクローム

このセクションでは、エティエンヌ・クレメンテルが制作したカラー写真・オートクロームをご紹介します。当時の通産大臣クレメンテルは政治家のクレマンソーの紹介で1916年にモネと出会いました。若い頃は自身画家でもあったクレメンテルは、アマチュアとして写真を撮っており、1920年頃、モネのもとを訪れ様々な画家の姿を撮っています。

エティエンヌ・クレメンテル（1864-1936）《ジヴェルニーの庭の池の前のモネ》1920年頃
オートクローム　オルセー美術館蔵
Photo © Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF

セクション 11

睡蓮

1883年、モネは終の住処となるジヴェルニーに腰を落ち着けました。1893年には水のある庭を造るため邸宅の南側の土地を買い足しています。池を描き始めたのは引っ越しから十年ほど経った1895年になってからですが、それまでと違い、自らの意思により造られた庭を描く、という新たな創造活動が始まったのです。
ジヴェルニーの庭は、植えられた花々の色にしても、緻密に練られた庭のプランにしても、池の造成にしても、自然に秩序を持ち込むものでした。1911年に妻のアリスを失い、1914年2月には息子ジャンが世を去るなどの不幸を経験した後、1914年に制作を再開したモネは、さらに大きなことを成し遂げたいと願い、《睡蓮》の大作に着手します。完成した作品群は1918年の第一次大戦の休戦協定を祝うために国に寄贈され、モネの死後、1927年にオランジュリー美術館に収められることとなりました。ここでは様々に展開した睡蓮の作品を展示するとともに、同時期に同主題を工芸作品で表現しようと試みたエミール・ガレや、ドーム兄弟によるアール・ヌーヴォーの工芸作品を併せて展示します。

クロード・モネ《睡蓮》1903年　油彩・カンヴァス　石橋財団アーティゾン美術館蔵　★

エミール・ガレ（1846-1904）《静淵》1889-90年
多層のクリスタルガラス　オルセー美術館蔵
Photo © Musée d'Orsay, Dist. RMN-Grand Palais / Patrice Schmidt / distributed by AMF

映像作品

『睡蓮』

―アンジュ・レッチアによる現代的・感覚的再構成

現代の映像作家アンジュ・レッチアがクロード・モネにオマージュを捧げる映像作品を展示します。キュレーションは、オランジュリー美術館のセシル・ドゥブレ館長。

出品作品の内訳

オルセー美術館所蔵のモネ作品42点
アーティゾン美術館および国内のモネ作品17点
モネに影響を与えた画家たちの作品17点
アール・ヌーヴォーの工芸作品11点 / 浮世絵15点 / 写真作品34点
映像作品2点（以上予定）

キャプションの後ろに★のついた作品は広報用画像です。

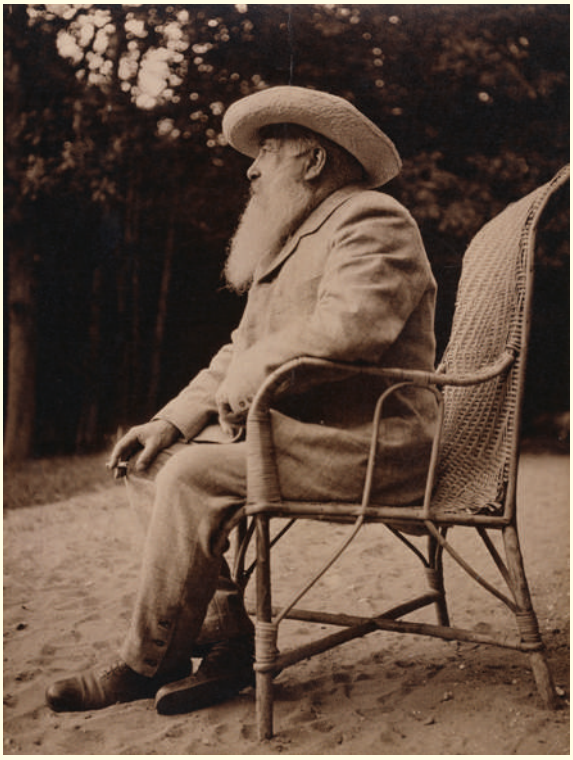
[開催概要]

展覧会名：クロード・モネ ―風景への問いかけ
オルセー美術館・オランジュリー美術館特別企画
会期：2020年7月11日（土）–10月25日（日）
開館時間：10:00–18:00（毎週金曜日は20:00まで、但し7月24日を除く）
＊入館は閉館の30分前まで
休館日：8月3日（月）、9月7日（月）、10月5日（月）
会場：アーティゾン美術館 6・5階展示室
主催：石橋財団アーティゾン美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、日本経済新聞社、BSテレビ東京
後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

アーティゾン美術館担当学芸員：新畑泰秀、伊藤絵里子、原 小百合

Musées d'Orsay et de l'Orangerie

本展はパリのオルセー美術館、オランジュリー美術館の学術的協力のもとに企画され、数多くの名作が特別に出展されます。



サッシャ・ギトリ（1885-1957）《ジヴェルニーの庭のモネ》1915年
パラジウム・プリント　オルセー美術館蔵
Photo © RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Jean Schormans / distributed by AMF

本プレスリリース及び「クロード・モネ ―風景への問いかけ」展についてのお問合せ先

「クロード・モネ ―風景への問いかけ」広報事務局（株式会社OHANA内）
担当：高橋・細川・妹尾
TEL: 03-6869-7881　FAX: 03-6869-7801
E-mail: monet2020@ohanapr.co.jp
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 りそな九段ビル5F

アーティゾン美術館についてのお問合せ先

アーティゾン美術館 広報部
E-mail: publicity@artizon.jp

同時開催

印象派の女性画家たち（4階展示室コレクション選　特集コーナー展示）
6月30日（火）–10月25日（日）
※4階展示室では本展示を含む「コレクション選」をご鑑賞いただけます。

交通案内

JR東京駅（八重洲中央口）、東京メトロ銀座線・京橋駅（6番、7番出口）、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅（B1出口）から徒歩5分

チケットは事前購入で Tickets must be purchased in advance
日時指定予約制　www.artizon.museum
Designated entry system by date and time

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2　Tel: 03-5777-8600（ハローダイヤル）
1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

公益財団法人石橋財団
アーティゾン美術館